



第34回日本エイズ学会学術集会・総会
共催シンポジウム2

パシエント・サミット

「HIV陽性者のPatient Journeyにおける
コミュニケーションの課題：恋愛と性生活」



2020年 **11月28日** 土 9:00～10:30

ライブ 2



井上 洋士 先生

順天堂大学大学院 医療看護学研究科 特任教授

高久 陽介 氏

NPO法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス



渡邊 泰子

ギリアド・サイエンシズ株式会社

高島 健

ギリアド・サイエンシズ株式会社

上村 悠 先生

国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター

宮城 京子 先生

琉球大学病院 HIV担当看護師

ペイシェント・サミット

「HIV陽性者のPatient Journeyにおける コミュニケーションの課題：恋愛と性生活」

抗HIV治療薬の進歩により、現在では適切な抗ウイルス療法を受けることでHIV陽性者(以下陽性者)の平均寿命は非陽性者と同程度になり、ほぼ普通の生活を送ることが可能となった。一方、陽性者に対するスティグマや周囲の理解の不足とそれらによる陽性者のセルフスティグマなど治療以外の課題は依然として存在し、陽性者のQOL(生活の質)の向上を図る上で大きな障壁となっている。

陽性者が生涯を通じてより自分らしく生活するためには、陽性者自身で意思決定や行動(患者エンパワメント、Empowering Patients)できる環境構築が重要である。特に陽性者の歩む人生(ペイシェント・ジャーニー、Patient Journey)は、告知を受ける前から始まり、初診、治療の開始、そして継続的な服薬までと長期にわたり、各ステージでのニーズや課題は多岐に及ぶ。

患者エンパワメントの重要な要素の1つにコミュニケーションがある。陽性者はペイシェント・ジャーニーの中で医療関係者、行政、パートナーや家族など様々な人々とコミュニケーションを通じて理解やサポートを得て生活を築いていくこととなる。しかし、このコミュニケーションが思うように図れず自分らしく生活できていない陽性者がいることも調査データで確認されている。

本サミットでは陽性者のコミュニケーションに焦点を当て、その重要性及び課題の確認と改善するためのアクションを模索する。具体例として陽性者にとって関心の高い「恋愛と性生活」を取り上げ、コミュニケーションの実態、陽性者が感じている難しさ、改善のポイント、陽性者及び周囲の人々にできること、などを調査データと陽性者の声の紹介を交えながら掘り下げ、「自分らしい生活」の実現に向けた議論を展開する。